

業績説明書

山本哲也（徳島大学大学院社会産業理工学研究部）

主要業績 1（論文 46）

Yamamoto, T., Uchiumi, C., Suzuki, N., Sugaya, N., Murillo-Rodriguez, E., Machado, S., Imperatori, C., & Budde, H. (2022). Mental health and social isolation under repeated mild lockdowns in Japan. *Scientific Reports*, *12*(1), 8452:1-11. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-12420-0>

本研究では、日本の反復的な自粛要請（マイルドロックダウン）が健康状態に及ぼす影響を調べることを目的とし、2020年5月と2021年2月の緊急事態宣言発令中に縦断調査を行った。解析対象は両方の調査に参加した7893名であった。その結果、2回目の宣言下では、心身の症状は全体的に減少した一方で、孤独感は緩やかに増大し、社会的ネットワークは減少していた。また、特に若年層のみ、抑うつや希死念慮が高い水準のまま減少せず、いずれの調査時でも心身の症状を多く示した。心理社会的変数間の相互作用構造を抽出した結果、孤独感と社会的ネットワークが、抑うつと最も密接に関連していた。これらの結果は、反復的な自粛要請が対人交流や孤独感に累積的な悪影響を及ぼすことを示しており、自粛生活下においては、若年層や孤独感の高い人々に対して特に配慮を要することが示唆された。

主要業績 2（論文 25）

Yamamoto, T., Uchiumi, C., Suzuki, N., Yoshimoto, J., & Murillo-Rodriguez, E. (2020). The psychological impact of “mild lockdown” in Japan during the COVID-19 pandemic: a nationwide survey under a declared state of emergency. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, *17*(24), 9382. <https://doi.org/https://doi.org/10.3390/ijerph17249382>

本研究は、日本における強制力を伴わない自粛要請（マイルドロックダウン）によるメンタルヘルスへの影響を検討した。2020年5月の緊急事態宣言下において、感染被害が大きかった都道府県の11333人を対象に調査が行われた。その結果、参加者の36.6%が軽度から中等度の心理的苦痛を報告し、11.5%が重度の心理的苦痛を報告していた。また、推定されるうつ病の有病率は17.9%であった。精神疾患の治療歴を有するものや、若年層、医療従事者などのメンタルヘルスが特に悪化していた。また、心理的苦痛の重症化には、孤独感の高さ、対人関係・経済的状況の悪化、仕事・学業の困難といった、様々な背景によるリスク因子が重なることが影響していた。これらの結果は、自粛生活下におけるメンタルヘルスへのアプローチとして、官民一体となった柔軟な働きかけが重要であることを示唆している。

主要業績 3（論文9）

Yamamoto, T., Sugaya, N., Siegle, G. J., Kumano, H., Shimada, H., Machado, S., Murillo-Rodriguez, E., Rocha, N. B., Nardi, A. E., Takamura, M., Okamoto, Y., & Yamawaki, S. (2018). Altered gamma-band activity as a potential biomarker for the recurrence of major depressive disorder. *Frontiers in Psychiatry, 9*:691. <https://doi.org/10.3389/fpsyt.2018.00691>

本研究では、うつ病の再発をもたらす認知的反応性の神経生理学的メカニズムを検討するため、うつ病エピソード寛解者（以下、うつ病寛解群）における γ 帯域活動（脳波指標）を検討した。51名の参加者を対象にして、ネガティブな気分誘発後の認知的反応性の評価と、語彙感情識別課題中の脳波計測を行った。その結果、課題の反応時間においては群間で差は見られなかった一方で、特にポジティブ単語の感情価判断時において、うつ病寛解群は統制群に比べて、有意に大きな後期 γ 帯域活動を示した。さらに、こうした γ 帯域活動が大きいほど、認知的反応性が増大することが示された。以上の結果から、ネガティブな気分を誘導されたうつ病寛解者は、ポジティブ情報の判断時において感情処理異常が存在することが示唆され、 γ 帯域活動が再発リスクのバイオマーカーとなりうる可能性が示された。

主要業績 4（論文6）

Yamamoto, T., Toki, S., Siegle, G. J., Takamura, M., Takaishi, Y., Yoshimura, S., Okada, G., Matsumoto, T., Nakao, T., Muranaka, H., Kaseda, Y., Murakami, T., Okamoto, Y., & Yamawaki, S. (2017). Increased amygdala reactivity following early life stress: a potential resilience enhancer role. *BMC Psychiatry, 17*(1), 27. <https://doi.org/10.1186/s12888-017-1201-x>

本研究は、幼少期ストレス経験と悲しみ感情喚起時の扁桃体活動が、抑うつ症状およびライフイベントストレスに及ぼす影響を検討した。精神疾患の罹患歴のない24名の参加者を対象にし、参加者に合わせて作成されたネガティブな気分誘発課題実施中の脳活動をfMRIを用いて計測した。その結果、幼少期ストレス経験者において、持続的な気分変化と扁桃体活動が認められ、こうした扁桃体活動は抑うつ症状とストレスの影響を緩衝することが示された。また、悲しい記憶想起時の扁桃体活動は、幼少期ストレス経験を持つ人の両側背外側前頭前野、運動野、線条体と正の機能的結合性を示した。これらの扁桃体活動は、症状の軽減や感情調節と一致する神経機能の増加と関連しており、うつ病やネガティブなストレスイベントに対するレジリエンス増強因子を反映している可能性が示唆された。

主要業績5（論文1）

Yamamoto, T., & Shimada, H. (2012). Cognitive Dysfunctions after Recovery from Major Depressive Episodes. *Applied Neuropsychology: Adult*, 19(3), 183–191. <https://doi.org/10.1080/09084282.2011.643959>

本研究は、うつ病エピソード寛解者（以下、うつ病寛解者）における認知機能の特徴を検討することを目的としていた。広範なレビューによって選定された記憶、注意、実行機能に関する神経心理学的検査を、うつ病寛解者12名と健常対照者30名とで比較検討した。本研究の結果、対照群に比べ、うつ病寛解者は言語学習・記憶、選択的・分割的注意が有意に低く、有意水準の補正後においても分割的注意の低下は有意であった。また、課題成績と罹患期間に有意な負の相関が示され、エピソードの期間が長いほど認知機能が低下する可能性が示唆された。さらに、これらの認知機能の特徴は、うつ病の基準を完全に満たした群とそれ以外の群を判別可能であった。以上の結果から、うつ病経験は、特に分割的注意のような高次の注意機能に持続的な悪影響を及ぼす可能性が示唆された。